

附章2 ミニシンポジウム『卑弥呼の時代を生きた人々』概要

平成13年9月22日18:30より、これまで実施してきた千坊山遺跡群の調査結果を広く一般に公開する為、シンポジウムを開催した。基調報告ではOHPを交え調査概要を報告した。パネルディスカッションでは当時交流のあった他地域の状況の報告をまじえ、千坊山遺跡群の評価についての見解を発表した。ここではその一部を紹介する。

司会者 荒木 良一氏（北日本新聞社）

パネリスト 久々 忠義氏（小矢部市教育委員会）

（五十音順）高橋 浩二氏（富山大学考古学研究室）

中原 斉氏（鳥取県教育委員会）

西井 龍儀氏（富山考古学会）

藤田富士夫氏（富山市埋蔵文化財センター）

古川 登氏（福井県清水町教育委員会）

片岡 英子氏（婦中町教育委員会）



《内 容》

久々 忠義氏

- ①千坊山遺跡は北陸でも有数の弥生集落である。24棟の竪穴住居は、2世紀末から3世紀の中頃までの約80年間営まれた。3家族が3世代にわたって暮らし、一時期には8棟程度（少なくとも約50人）があったと推定する。周囲の段丘上には墳丘墓が3基あり、家族ごとの墓と考えられる。
- ②六治古塚（四隅突出型墳丘墓）の形態は福井県に近く、山陰の墓制をもつ先祖が越の国の中枢である福井平野で開拓し、子孫が東への領域拡大の為日本海を北上し神通川・井田川を経て、この地にたどり着いたのではないかと推定。先祖の土地との繋がりを持ち、鉄器の鉄は山陰の親戚から手に入れて、開発を大規模に進めたのだろう。人々は月影式の土器を使用し、赤彩した台付細首壺や装飾壺を使った独特の祀りを生み出している。人々の出身地は、墓の形から山陰（四隅突出型）、東海（前方後方形）、近畿（前方後円形）、瀬戸内（円形）の西日本各地である可能性がある。
- ③千坊山遺跡群の開拓開始から80～100年たった頃、60mを超える王塚・勅使塚古墳が千坊山集落のすぐ山の上に見える。これらは3世紀末、千坊山集団のなかから婦負の国を領域とする王が誕生したことを示す。この時期、神通川、井田川、山田川、熊野川の上流には50余りの遺跡があり、15～16位の集団がいたと考えられるが、王塚・勅使塚レベルの古墳はなく、当時婦負郡に中心勢力がありこれらの地も婦負の国の領域だったと考えたい。

高橋 浩二氏

- ①「魏志倭人伝」にある倭国大乱後、戦いを通じて各地が統合される。婦中町には四隅突出型墳丘墓等の巨大墓があるが、このような文化は地域の統合が早く進んだ地域では早く現れ、そうでない地域では遅れる。婦中町には早い時期に巨大墓が出現しているので、地域の統合が早く順調に進んだのではないかと推定。
- ②六治古塚が造られた時期には、北陸各地で特定個人の為の墓が形成され始める時期にあたっており、千坊山遺跡群に造られた四隅突出型墳丘墓は周辺をまとめるようなリーダーの墓といえる。古墳時代初期には県内を二分するような地域性が形成されるが、そのうち今の婦負郡を中心とする地域を治めていたのがこの地の首長であると推定できる。統治範囲には、神通川流域一帯も入るかもしれない。

中原 齊 氏

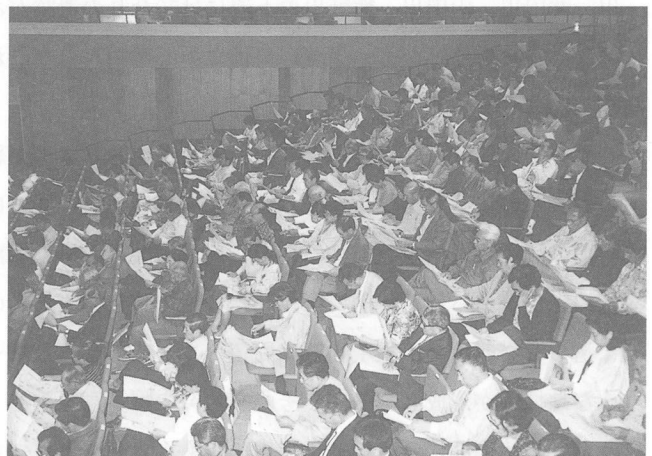
- ①山陰地方の全体像が分かる遺跡には日本最大級(170ha)の遺跡である鳥取県の妻木晩田遺跡がある。本遺跡は標高90～150mの山の上にある1～3世紀を中心とした弥生時代後期の集落で、7地区から構成される。仙谷地区、洞ノ原地区、松尾頭地区からは34基の弥生墳丘墓が、妻木新山地区、妻木山地区、小真石清水地区、松尾城地区からは約350程の竪穴住居跡、倉庫跡が見つかった。これらの地区はそれぞれ異なる役割を担い集合することで1つの大きなムラを構成していたと考えられる。また、墳丘墓と440m程離れた居住域で、同一個体の土器片が出土しており、墓で割った土器を持ち帰るなどしたの可能性も考えられる。このことから、住居群と墓は常にセットであることが分かる他、現在に通じる慣習があったとも考え得る。
- ②北陸と山陰の土器は、微妙な地域差はあるものの非常に似ており、地域間の交流を物語っている。
- ③山陰地方の四隅突出型墳丘墓には、貼石がある点が北陸と違う。踏み石状の突出部を通路にして墳丘に出入りし、祀りや葬儀をしていたと推測される。また、出雲市の四隅突出型墳丘墓からは吉備や北陸の土器が出土しており、これらの地方から土器を携えて王の葬儀に参列した人がいたのではないかと考えられている。

西井 龍儀 氏

- ①墳墓・古墳の規模を比較する実験的方法として、1/500,000の地図に全長を2乗して0.01を掛けた数を直径とした円を古墳中心に描くと、支配した地域、関連地域が視覚的に表現できる。全長が20m程度の弥生墳墓では直径4km、全長50mでは25km、日本海側最大の氷見市柳田布尾山古墳のような全長100mを超えるものになると100kmを超える範囲が影響範囲となる。この方法で考えると、全長66mの勅使塚古墳は婦中町から富山湾までの範囲で井田川、神通川流域を包括する。越中では、西は柳田布尾山古墳、東は王塚・勅使塚古墳が勢力を2分していた。
- ②越中では西部に前方後円墳、東部には前方後方墳が多いという報告がされているが、能登半島ではその時期に前方後方墳と前方後円墳が造られている。また、4世紀の終わり頃には加賀で北陸最大級の前方後円墳が造られている。
- ③墳墓・古墳は、婦中町の婦負郡、氷見市を含めた射水郡、小矢部市周辺の砺波郡、まだ希薄だが確認されていない古墳があると考えられる上市町、舟橋村を中心とする新川郡の4つの大きなグループにまとまる。中でも婦負郡には早い段階から非常に大きなものがまとまって造られている。

古川 登 氏

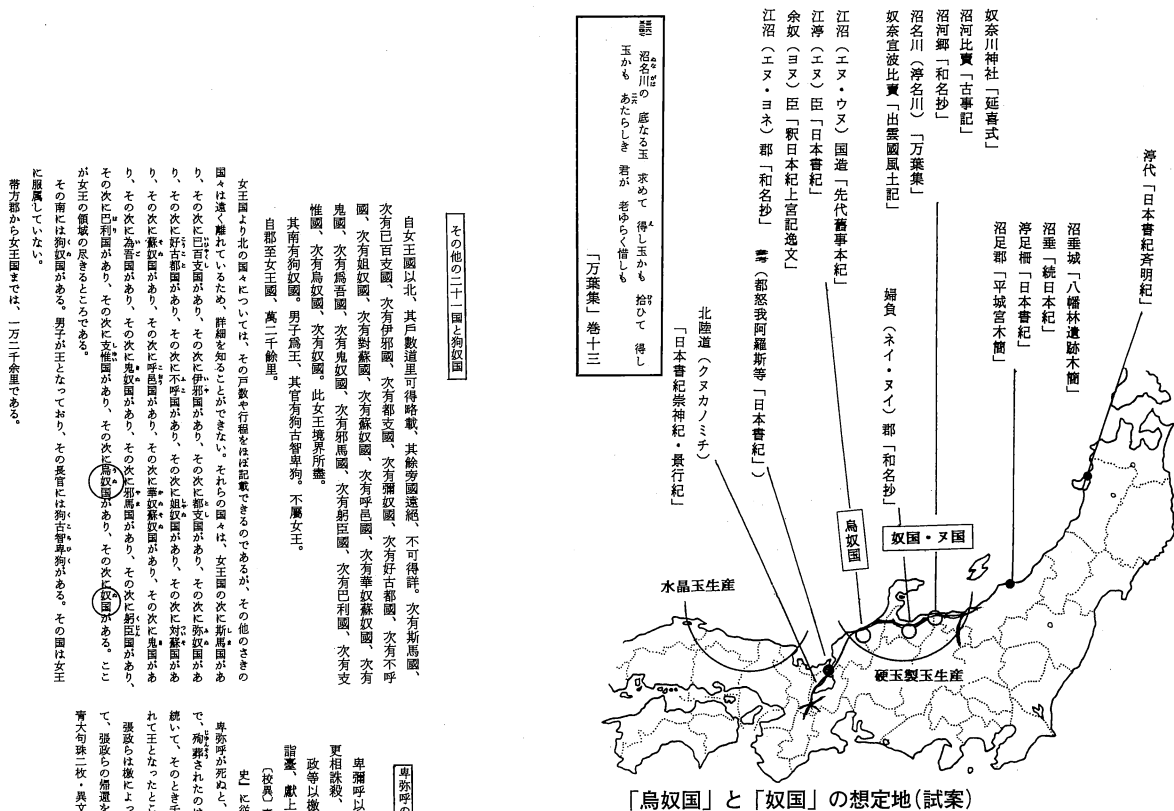
- ①北陸の四隅突出型墳丘墓としては、福井で確実なものが7基(小羽山6基、高柳2号墓)、不確実なものが4基(小羽山4基、片山鳥越3基)が、石川で確実なものが1基(一塚21号墓)、不確実なものが1基(一塚38号墓)が確認されている。北陸で最古のものは福井の小羽山30号墓で、法仏式期の築造である。本墓では、埋葬施設上に大量の土器が出土した他、棺内には朱が撒かれ、玉類や短剣など他地域との交流を指し示す副葬品が出土した。小羽山墳墓群の四隅突出型墳丘墓は、山全体を削り出し盛土して整形し、突出部は“しゃもじ”型を呈する。一方、婦中町の四隅突出型墳丘墓は“おたま”型であり、類似している。北陸の四隅突出型墳丘墓は、その形態の共性から“北陸型四隅突出型墳丘墓”ともいえる。
- ②現在調査中の一辺約15mを測る方形墓の棺内から出土した副葬品の状況から、富山県ではまだ四隅突出型墳丘墓が築造されている頃、福井では既に古墳時代に連続するような墓が出現していることが分かってきた。これについては後日正式に発表したい。



藤田 富士夫 氏

①漢の時代に出てきた来世観であり、新しい王墓思想である靈魂と肉体の分離思想を採り入れた、魂が昇天する為の装置として視覚的に編み出されたのが、外界と遮断した周溝の成立である。これは、北陸と東海、畿内大和という3つの地域と理念を同じくするものである。婦中町の四隅突出型墳丘墓の在り方は、古墳文化の先進思想を先駆けて採用したことを示している。

②『魏志倭人伝』に記された邪馬台国連合に属する28の国々の最後に“鳥奴国”“奴国”が出てくる。鳥奴国については、石川県と福井県の境界辺りにある江沼郡は、『先代舊事本紀』で“ウヌクニ”と読む。敦賀は、元は“ツヌガノクニ”と読み、『日本書紀』によると北陸道は“クヌカノミチ”とされる。すなわち“奴(ヌ)”は、富山県と石川県から西方の国々に付いていると考えられる。一方、婦中町周辺には婦負王国があったと考えるが、婦負(ネイ)は、“ヌイ”という古訓がある(『和名類聚抄』より)。邪馬台国は、北陸から山陰までの地域を“連合”の中に取り込んでいる国家で、それを構成していたクニの1つとして、特有な精神思想を持ったヌイ国があったと考える。



〔魏志倭人伝〕(部分)

卑彌呼の死と台子

卑彌呼の死、大作家、倭百餘年、狗奴者奴奴百餘年。更立男王、國中不服、更相誅殺、當時殺千餘人。復立卑彌呼宗女壹與年十三爲王、國中遂定。政等以徵告壹與、壹與遣使大夫率善中郎將被賜狗等二十人、送政等還、因詣臺、獻上男女生口三十人、貢白珠五千粒、異文雜錦二十四匹。

〔後西・壹與・底本は「壹與」に作るが、宋本「太平御覽」所引の「魏志」や「樂府詩集」に從ふ。

卑彌呼が死ぬと、大々的に葬がつくられた。その直後は百餘年(一歩は六尺、約一四五メートル)で、殉葬されたのは奴奴百餘人であった。あらたに男王が立ったが、國內が服従せず、殺し合いが続いて、そのとき千餘人が殺害された。そこでまた卑彌呼の宗族の娘である十三歳の台子が立てられて王となったところ、國內が安定した。

張政らは後によって台子に教え諭した。台子は、倭の大で率善中郎將の被賜狗(二十人)を献上して、強政らの帰還を祈らせ、その機会に朝廷に参上して、男女の生口三十人を献上し、白珠五千粒、異文雜錦二十四匹を貢納した。

杉本重司・森博通「魏志倭人伝を再読する」

『日本の古代1 倭人の登場』中央公論社 一九八五年より

藤田富士夫氏発表資料より抜粋